

# 世界をみつめて2

## —信頼関係と起こりえないこと—

石栗 勉

人間を長くやっていると予期せぬことに遭遇することが多々ある。

私が学生だった70年代冒頭、明石康著「国際連合」（岩波新書）が出版された。国際問題に関心ある学生の一人として、私は早速に購入し、読みにかかった。ところが、知識の乏しい私にはその本が面白くないのだ。当然、同書はお蔵入りとなる。それが20余年後、国連事務次長の明石氏の下で、5年間にわたり直接働くとは誰が想像できよう。「国際連合」は改定を重ね、2006年の最新版を明石氏よりお贈りいただいた。現在、外大生諸君にこの講読を勧めているところである。初版を蔵から出して大切にしていることは言うまでもない。私の内外の会議ではその企画、運営につき信頼、評価いただけるのは駄目学生の私として有り難いことだ。

東西対立の時は、共産主義の親玉とも云うべきソ連を盟主とする東側に属したモンゴルとは、例年の国連総会で、先方が提示する政治宣伝色の強い「軍縮週間」決議に一言申し述べるだけの関係だった。それが予想だにできなかったソ連の崩壊（91年12月）でモンゴルは眞の独立を得て、民主主義と市場経済を奉じる東アジアの国として再生したのだ。

当時、国連アジア太平洋平和軍縮センター所長だった私は、モンゴル大使を重要なパートナーとしてモンゴル非核兵器化などで協力したものだ。また、週1回はカプチーノを飲みつつアジア太平洋の平和につき論じることが習慣となり、それにより強固な信頼関係が築かれた。センターが困難に直面した時もしばしば支援を受けた。「昨日の敵は今日の友」である。

東西対立の激しかった60年代から80年代末までは、ソ連は核を含む巨大な軍事力と国内の専

制主義、また対外膨張政策をとる侮りがたい大帝国であり、西欧、米国、アジアの安全上の重大な脅威であった。米国のレーガン大統領が「悪の帝国」と称した所以である。

ソ連の崩壊とのニュースに接し、また「政治宣伝」か、「悪い冗談」とは私は勿論、世界のほとんどの人々の率直な反応だった。しかし、それが眞実と分かり、ソ連帝国内に取り込まれていた植民地（共和国）が次々と独立した。それまではロシア語専攻でもない私がソ連圏に行く可能性は全くなかった。ところが、中央アジア5カ国（カザクスタン、キルギスタン、タジキスタン、トルクメニスタン、ウズベキスタン）が同地域での非核兵器地帯設置を目指し、国連の協力を求めてきたのだ。

結局、私のセンターの担当となり、あり得ないことが実現した。対象は5カ国なのだが、ソ連時代にはモスクワと縦の関係は堅固であったものの、「独立で急に隣人を発見した」と横の繋がりが皆無に近かった。この構想の成否は全く不透明だったが、私は月に一回集まって協議する「対話の習慣」の導入から始めた。私が中心となつての10年近くの交渉で、互いの信頼関係を築き、国連内外、仏、英、米の反条約の圧力にも一致して対応できた。

信頼関係は誰かと一度握手したから、また、信頼を築こうと求めてできるものではない。誠実、有言実行、仁徳などの実践、涵養が成功の鍵である。

外大生もこれからの日々の生活、学習において信頼構築に心して過ごしてはどうだろうか。

いしぐり つとむ（教授・軍備管理・軍縮）